

対話は論戦ではありません。相手の矛盾を指摘して論破することが目的ではないのです。逆に、論戦のようになってしまうことを怖れて、矛盾が見えるところを聞かないまま、わかったフリをしても、相互理解には結びつきません。戦いではないことを自覚したうえで、わからないところは率直に聞いて知ろうとする、相互の探求心が力を発揮する営みです。

「論破～!」ではなく「どうして?」と聞く

日本人が考えていることをなかなか言わないのは、欧米人から見れば矛盾に映るでしょう。しかしそこで「思ってるなら言えればいいじゃん。言わなきゃわからんでしょ。ハイ、論破～!」と言われたら、その人と対話が成立するとは思えません。かといって、それ以上何も聞かれずに、「日本人は何も言わない人たちだから」と思われても、「気遣い」という文化を理解してもらったとは言い難いでしょう。

「どうして、思っているのに言わないのですか?」と関心をもって聞いてもらえれば、「相手や自分の立場を考えて、誰かが不快にならないよう思いやるからです」と説明する機会が得られます。同時に、自分にとって当然の「気遣い」が、相手の文化においては理解し難いことであると知る機会にもなります。相互理解ですね。



矛盾は相互理解の糸口

このように、矛盾に見えるところというのは対話において重要な契機となりえます。それが矛盾に見えるのは、自分が相手の背景を知らないがゆえ、であるかもしれないからです。

「気遣い」という文化的背景を知れば、「思っていることを言わない」のは矛盾ではなくなります。同様に、「不注意」という背景を知れば、「何度言われても直らない」のは矛盾ではなくなるでしょう。「想像力の障害」という背景を知れば、「非効率でもやり方を変えない」のは矛盾ではなくなるでしょう。

対話において、矛盾に見えるところは相互理解の糸口なのです。そこを黙って見過ごしてあげても、「気遣い」にはなるかもしれませんが、対話にはなりません。論破するためではなく、それが矛盾にならない背景を知るために、「どうしてなのですか?」と聞いてみるのです。

